

## V 「遼寧省遼河流域の遼代州県城址についての踏査報告」

高橋 学而

### 1. 序

かつて、筆者は中国遼寧省北部、遼北地区の鉄嶺市、開原市、昌図県及び西方の康平、法庫両県、更に阜新市に所在する遼代の諸遺跡を訪問・検討する機会を得た。本稿では、その成果の一端として、遼河流域の諸故城について各種報告を整理するとともに、今後の研究の方向性について若干の言及を行いたい。

### 2. 諸例の報告

① **奉集堡古城：集州故城** 以前、遼陽東南方の塔湾塔の塼塔を訪れた後、瀋陽市街への帰路、陳相屯塔山の塼塔址を訪問したことがある。陳相屯の塼塔については、それが高句麗山城内部に設けられるという特徴もあって注目され、戦後まもないその報告の中で塼塔についても触れられたことがあった<sup>1</sup>が、塔そのものは戦後の国共内戦の際に破壊されてしまっているとのことであった。同行の現地係官よりその情報の確認を頂いた後も、我々はその塔址への訪問を希望したが、現在はその確認すら難しい状況とのことで断念し、我々は、奉集堡古城に移動することとした。古城は、陳相屯塔山麓下、瀋陽市の東南約30 kmに位置する蘇家屯区陳相屯郷奉集堡村に残っている。1986年の調査によれば、城址は一辺約500 mの方形を呈し、四隅には角台が認められる他、城壁外面には馬面が確認される。また城壁外方には護城河が設けられているが、その幅は14 mと報告されている。城内からは灰色の布紋瓦、白色の陶磁器片が出土しているが、本古城が遼代の集州に当てられるのは、集州に設けられていた奉集

---

1 三上次男「塔山の山城—満州陳相屯の高句麗山城—」（『学海』4-5、1947年）36～41頁。六角七檐の塼塔については、以前、村田治郎氏は元、明代の造営とする理解を示しているが、現在、一般には、卓望山石棺銘等から遼代の建塔であると理解されている。村田治郎『満州の史蹟』（座右宝刊行会、1944年）本文571頁、章万岩「遼沈州卓望山無垢浄光塔石棺銘」（『遼海文物学刊』1987-1）122～123頁

県の県名が今なお残り、明畢恭『遼東志』、清顧祖禹『讀史方輿紀要』等に示された地理的記載と合致していることによっている<sup>2</sup>。我々は、僅かな時間であったが、同古城を訪問することができた。しかし、急遽訪れた事情もあり、時間的な制約が大きく、我々は、城址が一部隆起の残る部分を除いて城壁の多くは削平されていること、西壁の外側の護城河が幅10 m 弱の浅い水濠であること、場所によっては水たまり程度の泥水が残されていることなどを知ることができただけであった。

② **八面城：韓州故城** 次いで、韓州に当てられる昌図県の八面城について整理を行う。1990年代半ばまでは城壁の多くが残されていたが、それ以降の急速な都市化の進展のために、城壁は破壊され、それとともに観光地としての役割も与えられているようで、削平した城壁の址上に新たに城壁を模した高さ2 m 前後の壁を一面に築くなどしていた。PL. 1は、1990年代に調査を進めた許志国氏の報告から転載、一部加筆した平面図であるが、この図に従えば、韓州城は北壁がやや開いた台形状の四角形を呈している。その外周は3228 m、北壁は911 m、南壁830 m、東壁740 m、西壁747 mを測っている。この八面城を韓州城に当てるのは、早くに曹廷杰氏が『東三省輿地図説』中に、「八面城即韓州考」を記して以来である<sup>4</sup>。曹氏は八面城内からその辺款に“韓州”を刻す銅鏡が出土したことから立論しているのであるが、遼金代に四度治所を移動した韓州のうち、目下は、段一平氏の指摘するように、第三韓州城であると理解されている。PL. 2は、僅かに残る南東の隅部である。我々は、東壁沿いに歩いたが、城壁外は護城河の跡も全く残さず舗装された道路が南北に走っていた。段氏の理解に従い、第一韓州城が内蒙古自治区通遼市科左后旗浩坦古城（城五家子古城）、

2 馮永謙「沈陽地区遼代城址調査一兼考遼代沈州靈源県址」（『沈陽文物』創刊号、1992年）、後、王禹浪、薛志強、王宏北、王文軼編『東北遼代古城研究匯編（上）』（哈爾濱出版社、2008年）154～160頁

3 許志国「遼寧昌図県八面城城址調査」（『博物館研究』1997-2）74～81頁

4 曹廷杰「八面城即韓州考」（『東三省輿地図説』（『遼海叢書』第四冊、遼瀋書社、1985年）2248頁

5 段一平「韓州四治三遷考」（『社会科学戦線』1980-2）189～193頁、段一平「韓州四治三遷考」補証一初遷白塔寨」（『社会科学戦線』1985-4）211～212頁、武家昌「韓州州治二遷之地“白塔寨”考」（『北方文物』1986-1）45～46頁。



- PL.1 (左上) 八面城平面図(註3所載)
- PL.2 (右上) 八面城南東隅部の残存状態(筆者撮影)
- PL.3 (左下) 城五家子古城平面図(註5段論文所載)
- PL.4 (右下) 偏臉城平面図(註6所載)

第二韓州が風沙を避けて移動した白塔寨であることを前提に考察すれば、最初の移動が直線にして(以下、同じ)41,2 km、次の白塔寨から八面城までの三度目の移動が35,7 km、最後の第四韓州城である偏臉城までの移動が28,5 kmである。管見の範囲で、自然災害の影響からその州治を移す事例は、遼寧省に所在する遼代の州県では他に建州の事例が上げられる。建州は大凌河の氾濫が理由であった。第一建州である木頭城子古城<sup>7</sup>と第二建州の黄花灘古城<sup>8</sup>間の距離は

6 吉林省文物管理委員会(段静修執筆)「吉林梨樹県偏臉古城復査記」(『考古』1963-11) 612~615頁

15.4 km である。もちろん、州内に居住する定着農耕民を主とする州民の多寡にもよってその管轄する領域の空間的規模は変わってくることであろうが、これらの移動距離は州の管轄域の広がりやを推定する際に一つの資料を提供している。

③ **四面城：安州故城** 次に四面城である。昌図県四面城鎮に所在する四面城は、1982年に遺跡の分布調査が行われた際に簡略な調査が進められ、遼代を特徴づける磚、瓦当など数多くの遺物が出土したことから、研究機関の注目を受けるようになった遺跡である。古城は、八面城の南35 km、遼代棋州故城に当てられる康平県郝官屯村の小塔子古城の東25 km に位置している。従来、四面城鎮に遼代の古城が遺存していることは早くから知られており、かつては通州に当てる理解も呈されていた<sup>9</sup>。それが安州故城、帰仁県故城に当てられ、目下定論となっているのは、2000年に城内から金代の石碑が発見されたことによる<sup>10</sup>。この石碑の出土によって、『遼史』地理志に通州の管轄と記される帰仁県が、安州の治所とも重なり、それが現在の四面城に所在したと理解されているのである。版築の城壁の北壁は366 m、南壁308 m、東壁441 m、西壁490 m、外周は1605 m と PL. 5に示すようにいびつな東北隅の北に突き出した平行四辺形状を示している。我々は南門から入り、南壁を後ろにしつつ東壁沿いに進み、そのまま東北隅まで歩いたが、城外には東遼河の支流の一つである招蘇台河の支流が流れ、東側の護城河となっていることが明らかに見て取れた。その後、北壁を西方向に進み、北門近くから城内に入り南下した。踏査中、城壁上には、明瞭な突出部を見出すことは出来ず、北門に残されているとされる甕城も明瞭に確認はできなかった。城内では、中央からやや西南に位置した地点に一座の亀趺を見ることができた。既に碑石そのものは失われており、亀趺の頭部も補修されている状態である。前述した石碑は、報道によれば城内から残碑の形で出土しているとのことで、発見当時の鉄嶺市博物館の調査では、その周囲から破砕された石碑片、遼金時代の琉璃瓦片に加えて、鉄鏃、鉄刀などの武器類、

7 朝陽市博物館編『朝陽歴史与文物』（遼寧大学出版社、1996年）全212頁

8 前掲註7に同じ

9 郭毅生「遼代東京道の通州与安州城址の考察」（『社会科学戦線』1978-3）165～168頁。

10 許志国「一塊残碑糾正資料謬誤」（『鉄嶺晩報』2009年1月15日）第3版

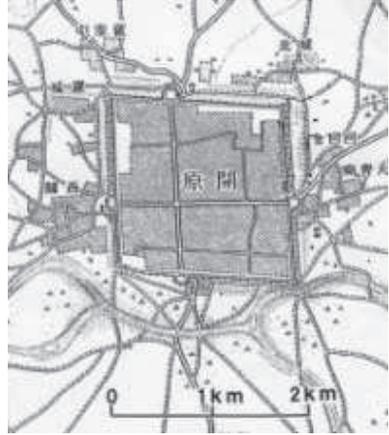
生活用具類が発見されているとのことであった。前出の石碑断片は、亀趺の南約10数 m の地点で農作業中に発見されている。また、四面城の東壁の外方1.5 km には、出土遺物から遼末金初に機能したことが推測される腰窩棚遺跡の調査がなされていることにも注意したい<sup>11</sup>。同遺跡は安州城民の日用使いの陶磁器を焼成した窯などが設けられた工房址であると理解されているのだが、故城の東南約9 km の太平郷長勝村鐘家屯では製鉄工房遺跡が発見されている<sup>12</sup>。この点、安州故城は、遼金代の州県城の周囲にその州県城の生活を支える工房が複数発見されている貴重な事例でもある。また、今回は訪れることはできなかったが、2007年から翌年にかけて、四面城の東南方15 km に所在する昌図県泉頭鎮塔東村で遼代の塔址の調査が行われているが、その際の調査によって、上限が道宗の咸雍年間に求められる八角形の塔址が確認されている<sup>13</sup>。調査報告によれば、明代の嘉靖年間に成った『開原図説』中の記録からは当時依然とし



PL. 5 四面城（註12所載） PL. 6 四面城航空写真（四面城鎮文化站『四面城歴史文化』2013所載）

- 
- 11 周向永、張大為「昌図県腰窩棚遼金遺址試掘報告」（『遼金歴史与考古』第一輯、遼寧教育出版社、2009年）27～40頁  
 12 周向永、許超『鉄嶺の考古与歴史』（遼海出版社、2010年）全378頁  
 13 寧昌図県塔東遼代遺址的發掘」（『考古』2013-2）56～65頁

て屹立していたこと、また白塔と称されていたこと、その近郊が旧婦仁県の地であることなどが知られる。近隣の地での城郭址の発見が待たれるが、同時に、本例の塔東村を始めとして遼寧省を中心に東北地方南部一帯には、現在でも「塔」字を残す地名が数多く見出されることもあり、遼代に造営されたものの現在は倒壊、崩落した塔の確認の必要性が認められる。



PL.7 旧開原城平面図（参謀本部編『明治三十七八年日露戦史』付図1914所載）

④ **咸州故城：開原市老城区** 遼代の城壁を中に収める形で後代に、城郭全体が修築されており、我々は、残された北壁

の一部の中に遼代の土城の版築を確認するに止まった。開原市の老城区が遼金代の咸州であることは、多くの文献資料から既に理解されているが、特に、金代劉元徳墓誌の出土は、同地が咸州であることを同時代の資料から示している<sup>14</sup>。我々は、旧咸州城、即ち、老城の西北隅の城壁断面と北面の護城河を確認するに留まったが、以前、元代の銅権等が出土した遺物の包含層の上面に遼金代の文化層があることが報告されている<sup>15</sup>。また、咸州故城内の西北隅に所在し、我々が訪問した崇寿寺の塔についても、明正統十二年『重修石塔寺碑記』の記述の分析に基づき、遼代の乾統年間（1101～1110年）の建立であることを推測する理解が呈されている<sup>16</sup>。

⑤ **銀州故城：鉄嶺市銀州区** 現在の銀州区銅鐘街に残る円通寺塔（鉄嶺の白塔）についてもその所在地まで訪れたが、八角十三檐のその塔も旧城の西北

14 馮永謙「金劉元徳墓誌考一兼考五代劉仁恭一族世系」（『黒竜江文物叢刊』1983-1）59～66頁

15 馮永謙「遼寧開原老城鎮出土の元代銅器和鉄器」（『文物資料叢刊』第7輯、1983年）163～167頁

16 姜念思「開原崇寿寺塔于遼代考」（『遼海文物學刊』1991-2）110～113頁

17 賈弘文修、董国祥纂『鉄嶺県志』（『遼海叢書』第2冊、遼瀋書社、1985年）763～783頁

隅に所在している。現在、旧城壁の全周が調査されているわけではなく、目下、旧城の規模は知り得ないが、『鉄嶺県志』（賈弘文修、董国祥纂）には、東西217丈、南北186丈5尺、周囲808丈8尺で、一面一門であることが記されており<sup>17</sup>、『鉄嶺県志』（賈弘文修、李廷榮輯）は、周囲4里60歩、高さ2丈、護城河の幅3丈と記し、載せられた「県治城池図」によれば、城門は一面に一門開くが、北門のみは東門に寄った位置に開かれている。しかし、銀州の所在地について考慮せねばならないのは、州治が移動した可能性についてである。以前、唐安東都護府延津州の治所について考察した周向永氏は、延津州に当てる張楼子山城に、銀州は当初設置され、後、現在の鉄嶺市の銀州区に治所を移動したと理解している<sup>19</sup>。かつて「青龍山山城」とも報告された張楼子山城は、鉄嶺県李千戸郷張楼子村の西南1.5km、凡河の南岸に位置している。全周2213mの城壁に囲郭された不整形な平面プランの城内、或いは北山門部分に多くの遼代の遺物が発見されている。高句麗の山城を遼、金代に州県として再利用する事例は数例を確認することができるが、周氏の理解に従えば、その事例を加えることになる。

⑥ **棋州故城：康平県小塔子古城** 康平県小塔子村に所在する小塔子古城は、遼河から西方200mに満たない河岸段丘上に占地している。組織的な発掘調査は行われていないが、70年代に馮永謙氏<sup>20</sup>、金殿士氏<sup>21</sup>らによって踏査され、その報告も公刊されている。両氏の報告に従えば、城郭の平面は、南北に長い長方形を示している。南北340m、東西260mと報告されている。城門は、東西の二門と南門一門が確認されている。城門外には甕城が備えられており、また、城壁上には馬面が、四隅には角台の址も認められると報告されている。筆者は、西門から東門へ抜ける道路を起点に、今回城壁の全周を歩くことができたが、それらとネット上で公開されている地図情報とを勘合すると、外周が1500mを超えるであろうことを推測できる。城内は早くから耕作地に利用されており、現状では遺構の確認は難しいが、馮氏の報文によれば、1923年、城内に道路を設ける際、「慶雲県」を辺款に記す銅鏡や篆体の銅印が発見されているとのこ

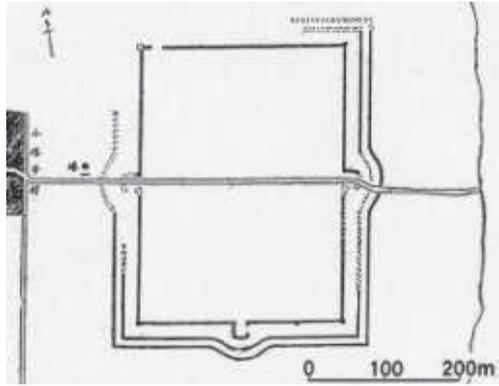
18 賈弘文修、李廷榮輯『鉄嶺県志』（『遼海叢書』第2冊、遼瀋書社、1985年）784～804頁

19 周向永「唐安東都護府延津州治考略」（『遼海文物學刊』1997-1）55～58、74頁

20 金殿士「遼棋州訪察記」（『社会科学輯刊』1981-2）96～98頁

21 馮永謙「遼代棋州探考記」（『遼寧師院學報』1981-3）38～40頁

とである。その他、開元通宝、皇宋通宝、景德通宝などが採集されている。また、注目すべきは、西門外に所在する塔である。塔は八角十三檐の実心で、現高25.4 m、基壇部分の一辺は3.6 mである。現地でご案内頂いた諸先生のお話では、満州国時代に我が国の研究者が調査に訪れているとのことであるが、今管見の範囲でその記録を確認し得ない。現在は、遼寧省文化局の指導により、補修工事を終えている。



PL.8 棋州城平面図(註21所載)

小塔子古城が遼代の棋州故城であると理解されているのは、王寂『遼東行部志』、或いは『遼東志』の棋州に関する地理的記述が合致することなどによっている。

### 3. 小 結

以上、遼河沿いの遼代の州県城址について整理して来たが、これら諸城址を、未訪問である流域の諸城郭も含めて、その分布と構造上の二三の特徴からいくつか考察してみたい。

〈分布〉 PL.9は、現遼寧省北部から西部へ続く一帯に所在する「遼金



PL.9 遼北から康平、法庫両県一帯に於ける「遼金」の分布(中国地図出版社『遼寧省地図冊』2005に加筆)

表1 遼北から康平、法庫両県一帯に於ける「遼金古城」の一覧

名称	所在地	比定される州県	図 [7] 中の番号
八面城	昌図県五星村	韓州	1
小城子古城	昌図県馬仲河新城子		
馬仲河古城	昌図県馬仲河	肅州	2
曲家黒城古城	昌図県曲家郷黒城村		
小坊城古城	昌図県曲家郷小坊村		
土城子古城	昌図県大興王家村		
高麗城	昌図県傅家鎮林場山河分場		
小城子古城	昌図県傅家鎮大地村		
馬小城子古城	昌図県傅家鎮大地村		
城里地古城	昌図県長髮翟家村		
什家偏城子古城	昌図県太平郷什家村		
七家子古城	昌図県七家子村		
趙家城子山山城	昌図県下二台趙家村		
小城子古城	昌図県平安小城子屯		
李家窩棚古城	昌図県古榆郷曙光村		
崔家溝古城	昌図県古榆郷崔家屯		
城梭子地古城	昌図鎮沙河子村		
黃花城古城	昌図県双井子巨隆村		
広貴城古城	昌図県双井子桂園村		
四面城	昌図県四面城鎮	安州	3
跑馬城子古城	昌図県老城鎮跑馬城子		
古城子古城	開原市八棵樹古城子村		
古城子古城	開原市慶雲堡古城子村		
新屯城子地城 (威州城比定地)	開原市中固新屯村北 開原市開原老城	同州 威州	4 5
懿路城 (銀州城比定地)	鉄嶺市新台子鎮懿路 鉄嶺市銀州区	銀州	6
岱海寨古城	鉄嶺市鶏冠山岱海寨村		
張樓子山城	鉄嶺市李千戸張樓子村		
城子屯古城	調兵山市曉南高麗溝村		
小古城子山山城	法庫県大孤家子鎮方位子村		
大古城子山山城	法庫県大孤家子鎮方位子村		
拉馬橋子古城	法庫県大孤家子鎮拉馬橋子村		
北城子山山城	法庫県十間房郷馬家溝村		
南城子山山城	法庫県馮貝堡郷周家溝村		
馮貝堡古城	法庫県馮貝堡郷馮貝堡村		
八虎山山城	法庫県四家子郷紅砂地村		
四家子古城	法庫県四家子郷四家子村		
朱千堡子古城	法庫県三面船鎮朱千堡子村		
平頂山山城	法庫県三面船鎮李家房申村		
馬鞍山城	法庫県葉茂台鎮石樁子村		
西二台子古城	法庫県葉茂台鎮西二台子村	渭州	7
南土城子古城	法庫県包家屯郷南土城子村	原州	8
三合城古城	法庫県包家屯郷三合城村	福州	9
古城子古城	法庫県登土堡子鎮位子村	安定県	10
北土城子古城	法庫県包家屯郷北土城子村		
五城店古城	法庫県臥牛石郷劉丙堡村		
古城子古城	法庫県丁家房郷古城子村		
古城堡古城	法庫県五台子郷古井子村		
石家荒地古城	法庫県依牛堡子郷戴家荒地村		

祝家堡子古城	法庫県依牛堡子郷祝家堡子村		
徐三家子古城	法庫県孟家郷徐三家子村		
和平古城	法庫県和平郷和平村		
遼濱塔村古城	新民県公主屯郷遼濱塔村	遼州	11
小塔子古城	康平県赫官屯郷小塔子村	棋州	12
(瀋州城北定地)	沈陽市旧城地区	瀋州	13
奉集堡古城	沈陽市蘇家屯区陳相屯	集州	14
高花堡古城	沈陽市于洪区高花堡郷	広州	15
古城子古城	沈陽市于洪区馬三家子郷	靈源県	16
石仏寺古城	沈陽市新城区子石仏寺郷	双州	17

表2 遼河流域の塔・塔址

名称	州県	所在地	時期	建城に関わる『遼史』記載	備考	資料
塔東村古塔址	不明	昌図県泉頭鎮	咸雍年間以降 (1065年～)	—		①
小塔子塔址	韓州	昌図県三江口郷	遼代	聖宗	20世紀初一部残存	②
崇寿寺塔	咸州	開原市老城鎮	乾統年間 (1101～1110年)	聖宗開泰八年		③
円通寺塔	銀州	鉄嶺市銀州区	聖宗代以降?	渤海		④
小塔子塔	棋州	康平県郝官屯郷	遼代	太祖		⑤
七星山塔	双州	沈陽市瀋北新区	咸雍10 (1074年)	太宗時	1931年倒壊	⑥
無垢浄光舍利塔	瀋州	沈陽市皇姑区	重熙13 (1044年)	※ (1)		⑦
沈陽旧城外白塔	瀋州	沈陽市旧北関	乾統8 (1108年)	※ (1)		⑧
陳相屯塔山塔	集州	沈陽市蘇家屯区	重熙14 (1045年)	渤海		⑨※ (2)
白塔堡塔	瀋州	沈陽市白塔堡鎮	遼代後期	※ (1)	日露戦争時に破砕	⑨
遼濱塔村塔	遼州	新民県公主屯鎮	乾統10～天慶4年	太祖		⑩
遼陽白塔	東京	遼陽市白塔区	遼代後半	太祖		⑫

〈表註〉

- 瀋州の建城の時期について、『遼史』『地理志』は記さないが、朱子方氏以来、遼代に求めるのが一般的である。朱子方「遼代沈州建置考」(『沈陽地方志資料叢刊』第6集、1986年)後、朱子方「遼代沈州建置考」(『東北地方史研究』1986-4)
- 但し、銘文を刻す石函の原出土地の情報に揺れがあり、卓望山を塔山ではなく、東陵区桃仙鎮莫子山に当てる理解が姜念思氏によって呈されている。姜念思「従考古資料看遼代沈陽地区的仏教」(『遼金歴史与考古』第一輯、遼寧教育出版社、2009年)273～278頁 姜念思「卓望山小考」(未刊行)

〈番号対応資料〉

- 遼寧省文物考古研究所、鉄嶺市博物館、昌図県文管所(李龍彬、李海波、周向永)「遼寧昌図県塔東遼代遺址の発掘」(『考古』2013-2)56～65頁
- 段一平、孟慶忠「遼寧昌図古遺址和古城址調査記」(『北方文物』1986-1)43～44頁 武家昌「韓州州治二遷之地“白塔寨”考」(『北方文物』1986-1)45～46頁
- 姜念思「開原崇寿寺塔于遼代考」(『遼海文物學刊』1991-2)110～113頁
- 周向永、許超『鉄嶺の考古与歴史』(遼海出版社、2010年)全378頁
- 段殿士「遼棋州訪察記」(『社会科学輯刊』1981-2)96～98頁、馮永謙「遼代棋州探考記」(『遼寧師院學報』1981-3)38～40頁、姜念思「従考古資料看遼代瀋陽地区的仏教」(『遼金

- 歴史与考古」第一輯、遼寧教育出版社、2009年）273～278頁
- ⑥李仲元「遼双州城考」(『遼金史論集』第二輯、書目文獻出版社、1987年) 96～104頁、李仲元「遼双州遺址遺物考」(『中国考古集成』第16冊、北京出版社、1997年)、後、王禹浪等編『東北遼代古城研究匯編・(上)』(哈爾濱出版社、2008年) 278～288頁に収録
- ⑦沈陽市文物管理弁公室、沈陽市文物考古工作隊(周陽生、李曉鐘、劉煥民執筆)「沈陽塔灣無垢淨光舍利塔塔宮清理報告」(『遼海文物學刊』1986-2)30～52頁、李鑫「沈陽無垢淨光舍利塔碑、函及相關研究」(『遼寧省博物館刊』(2011)』、2011年)179～185頁
- ⑧李彩奮「沈陽崇壽寺白塔の文物」(『考古通訊』1957-6) 34～37頁
- ⑨章万岩「遼沈州卓望山無垢淨光塔石棺銘」(『遼海文物學刊』1987-1) 122～123頁
- ⑩馮永謙「沈陽白塔堡白塔年代辨疑」(『北方文物』2001-3) 30～35頁
- ⑪劉一秀「遼濱塔“中宮”考古取得重大進展」(『沈陽日報』1993年9月29日)、李善遠「遼濱塔中宮又有重大發現」(『遼寧日報』1993年10月6日)、沈陽市文物考古研究所(李曉鐘)「沈陽新民遼濱塔塔宮清理簡報」(『文物』2006-4) 47～57、1、97頁
- ⑫馮永謙「志書編写考古資料の運用」(『遼寧地方志通訊』1985-3) 46～51、18頁

古城」の分布を示し、表1は、それら諸古城址を一覧化している。中国東北地方に所在する遼代に機能した城郭は、金代にあっても再利用されることが多い上に、また、一部の古城址を除いては調査されることもなく、70年代の報告から現在に至るまで出土遺物をもとに一樣に遼金古城と一括されることが多い状況である。この点、資料の活用には大きな制約を伴う。我々が今回訪れた遼北地区についても、近年、鉄嶺市博物館の裴耀軍、陳莉両氏は、遼北地区だけでもいわゆる「遼金古城」は60カ所を超えると述べているが<sup>22</sup>、若干の調査がなされた新民県の遼濱塔古城と沈陽市新城区に位置する石仏寺古城以外は、これらの諸古城に関する資料の大多数は所在情報が中心である。

まず、これらの分布に着目すると、明らかに遼河沿いに集中していることが知られる。ここで想起したいのは、黒龍江省の拉林河、更には、吉林省の第二松花江沿いに分布する所謂遼金古城についてである。以前、王永祥、王宏北両氏は、黒龍江省に所在する金代の古城を、1. 分布、2. 構築方法と分布の規則性、特徴、3. 修築の年代の三点から概括したことがあったが、その中で、拉林河の右岸に集中して分布する古城址に着目している<sup>23</sup>。両氏は、同河右岸に分布する17カ所の古城が、5～10 km 前後の間隔で南北に確認されることについて、水運と河岸沿いの陸路が重要な交通幹線となっていたことを推測し、更

22 裴耀軍、陳莉「遼金元時期遼北地区的建制及交通綜述」(『遼寧省博物館館刊』第2輯、遼海出版社、2007年) 111～125頁

に、これらが拉林河対岸に位置する遼軍に対する防衛線を構成していたことを指摘した。これら沿岸の諸古城が、いずれも拉林河を正面にして構築されており、河流とは逆方向に城門が開口していること等がその事由であるが、その時期については、『金史』の記載などから対遼戦争前を推測している。次に、張英氏は、第二松花江中、下流の前郭、扶余、榆樹、農安、徳恵、九台、舒蘭等の七州市に所在する、渤海から清代に至る106箇所の古城の分布に着目している<sup>25</sup>。氏によれば、第二松花江中、下流の遼金古城の集中的な分布は、遼代中後期の三次に渡る、女真への対抗策として理解されるとのことであった。聖宗の太平6年(1026年)の「以迷離己同知枢密院、黄嗣為兵馬都部署、達骨只副之、赫石為都監、引軍城混同江・疎木河之間。黄龍府請建堡障三、烽台十、詔以農隙築之」<sup>26</sup>、或いは道宗清寧4年(1058年)の「城鴨子、混同江二水間」<sup>27</sup>等の記載は対女真政策の一環として理解されるとするのだが、なかでも寧江州が清寧年間に置かれた記載に着目し、遼末道宗、天祚帝の時期の対女真策戦の軍事的必要性から築かれたと理解するものであった。これらの理解の妥当性については、今後の調査の充実とともに明瞭になることと思われるが、水運、交通幹線の確保に加えて、遼河についても防衛上の観点から考えてみたい。

〈時期〉 本稿で対象とする地域の諸州県城について、『遼史』地理志は、建城、或いは州県の設置の時期について記すが、その記載に直接拠ることができないのは既に諸先学の論考に指摘される通りである。

前節で記したように遼代に築かれ、金代に再利用された事例の多いこれら所謂遼金古城の修築の過程を、現在までの出土資料から考察を試みるのは困難が生じるが、本節では、遼代の州県城の内部に、或いは隣接して築かれる塔について、建塔の時期を確認したいと考える。今回、我々が訪れた遼北最北端の塔は、咸州故城西北部に所在する開原崇寿寺の塔であるが、前掲の[表2]

23 王永祥、王宏北「黒龍江金代古城述略」(『遼海文物学刊』1988-2) 36~45頁

24 松花江「松花江地区一九八一年文物普查簡報」(『黒龍江文物叢刊』1983-1) 28~32頁

25 張英「第二松花江中、下游段七県遼金古城概述」(『博物館研究』1985-2) 42~49、52頁

26 『遼史』卷十七・本紀第十七・聖宗八

27 『遼史』卷九十八・列伝第二十八・耶律儼

は、遼河沿いの塔、塔址を一覧化している。尚、表中には、当該州県の建置に関わる『遼史』地理志の記述を加えている。

これら諸塔の建塔の時期について確認すると、いずれも重熙年間以降である。ここで他地域に於ける造営もしくは改修された年代の明らかな遼塔を確認すると、山西省応県仏宮寺釈迦塔（清寧2年：1056年）、山西省靈丘県覺山寺塔（大安5年：1089年）、朝陽北塔（重熙13年：1044年）、慶州白塔（重熙16年：1049年起工、大康6年：1080年、乾統5年：1105年補修）と重熙年間以降となっている。零細な情報からは具体的な時期に言及し難いが、建塔の時期を参考に本稿の対象とする遼代の州県城が少なくとも遼代後半期に機能していたことを推測することは可能であると考ええる。

以上、本稿では遼河沿いに分布する遼代の州県城について、東面に対する防衛という軍事的側面からの視点の重要性を指摘したいと考える。『遼史』の記載によれば、今回踏査した諸古城址の比定される諸州県は、凡そ北女直兵馬司の管轄下に属することが知られる。『遼史』「百官志」は、北女直兵馬司が遼州に置かれていたこと<sup>28</sup>、地理志の記載によれば管轄下に遼州、棋州、韓州、双州、銀州、同州、咸州、肅州を置いていたことが知られる<sup>29</sup>。このうち、同州、肅州は、それぞれ開原市中固鎮新屯村古城<sup>30</sup>、昌図県馬仲河鎮古城に当てられている<sup>31</sup>。これらを先に示したPL.9中にその位置を確認すると、遼河に沿い南北方向に分布していることが知られる。

今回、踏査した遼代の州県のうち、康平県の棋州古城である小塔子古城は、70年代後半に踏査した前出の馮氏によれば、日露戦争当時、日本軍の食糧倉庫が設けられており、遼河を挟んで対する現在の昌図県金家鎮にロシア軍が駐屯していたとのことであった。そこで、確認を試みると、陸軍参謀本部編纂『明治三十七八年日露戦史』第十卷中の記述に、奉天会戦の後、第三軍隷下の歩兵第二十五連隊などから構成される渡辺支隊が明治38年（1905年）4月6日に小塔

28 『遼史』卷四十六・志第十六・百官志二・北面边防官「北女直兵馬司。在東京遼州置。」

29 『遼史』卷三十八・志第八・地理志二・東京道

30 馮永謙「遼東京道失考州県新探—《遼代失考州県辨証》之一」（『遼金歴史与考古』第一輯、遼寧教育出版社、2009年）202～235頁

31 金殿士「遼、金肅州及清安県故址考」（『地名叢刊』1986-4）10～12頁

子に至り、陣地を構築、更に軍橋を遼河に架けたことが知られる。また、金家鎮にはミシチェンコ中将指揮下の騎兵团の一隊が進出している<sup>32</sup>。渡辺支隊の陣地構築の具体的な状況について、同書からこれ以上知ることはできないが、これらの情報は現地に伝えられている事情の一斑を裏付けるものとしての理解が可能である。更に、前出の双州故城であることが明らかとなった石仏寺古城は、日露戦争時にロシア軍が駐留している。遼河が日露戦争時にあっても両軍にとって軍事的に大きな意味を持っていたことを知る事ができるのである。更に、国共内戦時、瀋陽はその攻防の要衝となったが、沈陽市街の北方、石仏寺古城には、南下してくる共産党軍に対する備えとして古城の南に数箇所のトーチカが築かれている。これらの事例は、近代戦にあっても遼河の軍事的意味合いが依然として強かったことを裏付けている。特に小塔子古城、石仏寺古城はともに遼河及びその支流の渡渉地であることを理解する時、その占地の重要性は国共内戦時、或いは日露戦争時を遠く遡る遼末時にあっても同様と推察される。

上京会寧府から西方、拉林河、次いで第二松花江を越えると、南北を縦貫する次の大河は遼河となり、遼河、とりわけ東遼河を越えると、北寄りには科爾沁の草原から天山、林東に続き、南よりの路線を通ると法庫を抜け、彰武、阜新へと連なる契丹の腹地に進入する。今回、踏査し得なかった州県城を含め、遼河沿いに分布する諸城郭は、上に示した諸塔の修築の時期が重なっていることを踏まえて、遼河東方の女真勢力の興起に連動し、遼代後半、特に興宗代以降に整備された可能性を推測したいと考える。

---

32 陸軍参謀本部編纂『明治三十七八年日露戦史』第十卷（東京偕行社、1914年）本文1258頁中の第十二篇：満洲軍ノ整備、第五十一章：兵力ノ整頓、二：四月ノ情況、其三：開原、昌図及三眼井附近先進部隊ノ戦闘による。